

オンライン会議システムを活用した博物館事業の試み

神 康夫¹⁾・小山隆秀²⁾・中沢秀一³⁾

Using a Web Conference System to Explore the Potential of Digital Museum Outreach Program

JIN Yasuo, OYAMA Takahide and NAKASAWA Syuichi

キーワード：新型コロナウイルス感染症拡大防止、コロナ禍、オンライン活用事業、Zoom、遠隔授業、出前授業、学校教育、教育普及、オンライン会議、東北地区博物館実務担当者会議、青森県博物館等協議会、青森県博物館大会、講座、講演、視察

はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う社会における諸問題が発生して早や2年を越える。人々の行動や社会の様式がどんどん変容し、かつての常識が今や常識でなくなりつつあるほどの変化である。近年大きく進展してきた技術の中で、コロナ禍において急速に普及・浸透してきたものの一つが「オンライン会議システム」であろう。Skype、Teams、Webex、Zoomなどを提供する各社が、音声・画像品質、セキュリティなど、技術開発にしのぎを削ってきていたが、もはや使いこなすことが当然のビジネスツールとなってきた。

当館では令和元年度（2019年度）より、オンライン遠隔出前授業の依頼を受け、いわゆるゲストとしてオンライン会議システムを利用してきた。令和3年度には、事業を運営するホストとしてオンライン会議システムを使用する必要に迫られ、2回のオンライン会議を開催し、うち1回は、当館から約60km離れた中泊町から庭園のある宮越家を紹介する「オンライン視察配信」を含むものである。

そこで本稿では、近年、当館のオンライン会議システムを用いて実施した事業について、ゲストとしての事業、ホストとしての事業を記録としてまとめることとし、実践の経緯や手法、気づいた課題等を報告し、今後の博物館活動の在り方に活かすきっかけとしたい。

（神 康夫）

1. 当館でのオンライン設備の整備状況

当館では展示解説として、平成27年より展示室にQRコードを設置し、一般観覧者が当館「デジタルミュージアム」に各自のスマートフォン・タブレット等端末機器でアクセスし、展示資料の詳細情報を閲覧できるようにしていた。このことは観覧者が通信料を負担する状態であったが、フリーWi-Fiを整備しアクセスできる環境が整ったのは平成29年であった。Wi-Fi環境は県立施設共通のLGMAN（総合行政ネットワーク）に組み込まれた設備ではなく、インバウンド対応の一環として国土交通省の観光施設・設備拡充に関する交付金を活用し、無料公衆無線LAN環境（Wi-Fi）を整備したものである。その結果、観覧者は館内において展示資料の詳細情報・解説の閲覧、観光情報・旅行行程・交通機関等の情報収集などを自身の端末機器を用いて通信料無料でできるようになり、観覧者の利便性が向上した。

しかし令和2年（2020）初頭から新型コロナウイルス感染症拡大いわゆる「コロナ禍」によって観光客が激減しはじめたことに加え、当館建物の耐震強度不足によって令和2年（2020）10月より休館を余儀なくされていることから、オンラインでの遠隔出前授業や会議など、このWi-Fi環境を活用した博物館事業を充実させて将来的な誘客に結びつける手法を構築すべく、模索をはじめたところである。

（神 康夫・中沢秀一）

2. 令和2年度までのオンライン活用事業

オンラインを活用した事業は、令和元年度に2回、同2年度に3回実施した。実施内容は、青森県立青森第一養護学校を通じて依頼を受けて他県の複数の特別支援学校とオンライン（SkypeあるいはZoom）で結ぶ遠隔出前授業で、いずれも主催者（ホスト）ではなくゲストとして参加したものである。授業の進め方としては、生徒達が考えた質問に沿って、教育普及や考古、歴史の各担当職員が作成した資料や館内展示を使って、説明しながら回答していくというスタイルで行われた。以下、その概要を紹介したい。

1) 青森県立郷土館 研究主幹（〒030-0802 青森市本町2丁目8-14、以下同じ）

2) 青森県立郷土館 学芸主幹

3) 青森県立郷土館 主任研究主査

令和元年度（2019年度）

参加校：青森県立青森第一養護学校（所在地：青森県青森市）

参加者：中学部1年生1名、社会科担当教諭1名（6月27日）

中学部2年生4名、担当教諭3名（9月13日） 計9名

回数と内容：2回

6月27日 「青森県の縄文遺跡を紹介しよう」＝縄文時代と三内丸山遺跡に関する内容

9月13日 前半：三内丸山遺跡と縄文人の生活について

後半：「青森県のりんご」＝りんご栽培の始まり、青森はなぜ日本一の大産地になったのか。りんごの種類・栽培の方法等、りんご産業に関する内容



縄文遺跡に関する説明



青森県のりんごに関する説明

令和2年度（2020年度）

参加校：青森県立青森第一養護学校（ホスト校）、筑波大学附属桐が丘特別支援学校（所在地：東京都板橋区）、愛知県立ひいらぎ特別支援学校（所在地：愛知県半田市）

参加者：中学部3年生4名、担当教諭3名（7月17日）

各校中等部2年生8名、社会科担当教諭3名（12月14日）

各校中等部2年生8名、社会科担当教諭3名（1月24日） 計29名

回数と内容：3回

7月17日 「東北地方～青森県ではなぜねぶたが盛んなのか～」

東北地方の学習（東北6大祭り他）から青森県の事例としてのねぶたとその関連人物である板画家棟方志功の沿革と生い立ちに関する内容。

12月14日 「青森県のねぶたや伝統工芸についての疑問を解決しよう～博物館の先生に質問しよう～」

前回の遠隔授業やその後学んでいく中で生まれたねぶた・津軽塗についての疑問・質問に答えていく内容。

1月25日（令和3年）「博物館の先生に質問しよう～アイヌと青森県十三湊の交易～」

中世北日本を代表する貿易拠点だった十三湊を介しての青森県とアイヌ民族による交流・交易の歴史に関する内容。



棟方志功に関する説明



津軽塗の工程に関する説明



アイヌ民族との交易に関する説明

3. ゲストとしての令和3年度オンライン活用事業

ここでは、当館がゲストとして令和3年12月までに教育普及分野で2回行った遠隔出前授業での活用実績の様子を紹介する。令和4年3月までにさらに3回の申し込みがあるが、これらは本稿締切りの関係で今回は紹介できないため、別の機会に紹介したいと思う。

実施までの経緯

令和3年度も、例年に引き続き青森県立青森第一養護学校を主体とした他県の複数特別支援学校からの依頼（以下実施目的参照）を受けて、当館とそれぞれの教室をオンラインで結び、Zoom を使った遠隔出前授業として実施された。

実施目的（青森県立青森第一養護学校他遠隔合同授業実施計画案抜粋）

青森県立青森第一養護学校では教育課程を履修する生徒の少人数化に伴い、授業全般において生徒同士の話し合い活動が困難な状況にある。この課題解決のために、これまで遠隔授業を推進して行っている筑波大学附属桐が丘特別支援学校、愛知県立岡崎特別支援学校と連携し、以下の目的に沿って、遠隔合同授業を行う。

- 1、ICT を活用したビデオ通話による遠隔合同授業（社会科）を行うことにより、話し合い活動を計画的に組み、思考・判断・表現力を高める。
- 2、両都県の様々な違いなどを質問し合うなどコミュニケーションツールとして ICT の活用を図り、児童生徒の伝え合う力を伸ばしていく。また博物館（青森県立郷土館）との遠隔授業を通じ、疑問を解決する学習を取り入れることで、深い学びにつながる授業も展開していきたいと考える。

（1）事例①「縄文時代」

日 時：令和3年7月15日 14：30～15：10

対 象：各校中学部1年生・各校社会科担当教員 計14名

担当職員：考古分野：杉野森淳子 教育普及：中沢秀一・滝本敦（歴史・先人分野兼務）

タブレット・照明・資料補助スタッフ等：神 康夫・中村理香

実施の準備

各校が社会科授業の縄文時代について学んでいく中で、疑問に思ったことやもっと詳しく知りたいと思ったことを青森県立青森第一養護学校の教員が取りまとめて質問形式にし、それらに当館考古分野担当学芸員がZoom を使ったタブレット端末で撮影しながら回答・解説していく、という形式とした。

実施の準備としては、考古分野担当学芸員が質問・疑問に対応する館内資料選定や、解説内容の検討、提示パネルなどの補助資料作成を行い、教育普及担当は依頼校との連絡・調整、機器の設定準備・操作等を分担して行った。

<郷土館に依頼された質問・疑問の内容（原文ママ）>

<1班>①～③を先に説明していただきたいです。

①縄文時代は集落が海の近く（森もすぐ近く）にあるが、弥生時代は、山の方にあるのはなぜか？

予想した答え 縄文時代は狩りがしやすい場所で、弥生時代はお米を作っているから山の実がとれる場所がよかった。

②縄文時代は兵隊みたいな人がいないのに、弥生時代には兵隊みたいな人がいるのはなぜか？

予想した答え 縄文時代は悪い人がいなかった。弥生時代になると悪い人が出てきた。

③縄文時代は貝を一つの場所に捨てていたが、弥生時代にはそのような捨てる場所がないのはなぜか？

予想した答え 弥生時代には、ゴミ箱みたいなものができた。または、布みたいなものを袋にしてゴミを入れた。

④、⑤の質問は、時間があれば、答えていただきたい質問です。

④縄文時代は、服が茶色なのに弥生時代は白いのはなぜか？

予想した答え 弥生時代には、白い布が出てきた。

⑤縄文時代は家が低いのに、弥生時代は高くなるのはなぜか？

予想した答え 弥生時代には、高く作る技術ができたから

<2班> 質問内容は1つです。

①縄文時代は水辺が近くにあるのに、弥生時代は水辺がないのはなぜか？ ※1班の①と似ていますが。

予想した答え ・大きな建物を建てるために水辺が近くにないほうが良いことや、水辺ではないほうが米を作るのに適しているからではないか。

・縄文時代は、海辺に魚がいたから暮らしたが、弥生時代は海辺に魚がいなかったから。

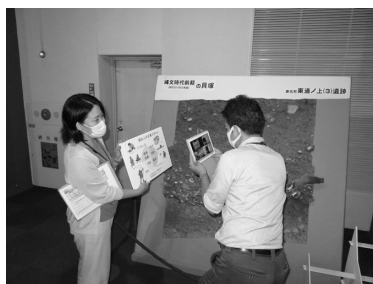
・お米を作るのには、平地のほうがよかったから。

実施の様子

1班①～⑤、2班①のそれぞれの質問に対して、当館考古分野担当学芸員が、最も内容に関係のある館内展示資料やパネル等の補助資料を使って回答・解説を行った。なお配信には、職員5名で対応した。



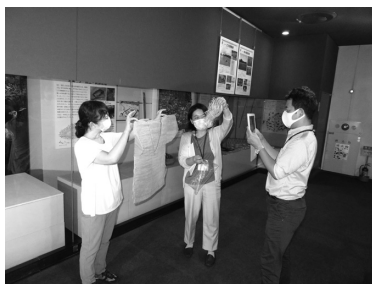
質問 1-①への回答・解説の様子



質問 1-②への回答・解説の様子



質問 1-③への回答・解説の様子



質問 1-④への回答・解説の様子



質問 1-⑤への回答・解説の様子



質問 2-①への回答・解説の様子

(2) 事例② 合同遠隔社会科見学「ねぶた・りんご」

日 時：令和3年10月5日

10:00～12:00（うち、当館の担当時間は11:00～12:00の60分間）

対 象：事例①の参加3校＋その他全国17校 計20校

小学部高学年・中学部全学年・各校社会科担当教員 計155名

担当職員：ねぶた：中沢秀一（教育普及） りんご：滝本 敦（歴史・先人分野兼務）

写真撮影・照明・資料補助スタッフ等：中村理香（美術分野兼務）

実施の準備

今回は青森県立青森第一養護学校他全国19の参加校が、青森市内にある三内丸山遺跡と青森県立郷土館をオンラインでつないで体験する遠隔の社会科見学という趣向で実施された。

当館担当分では、このプログラムで遠隔社会科見学に参加するにあたり、各校でねぶたや青森県のりんごについて事前学習した中で、疑問に思ったことやもっと知りたいと思ったことをホスト校がリストにまとめ、当館に提示した。その中から効果的であるものを2つずつ教育普及担当職員（中沢、滝本）が選別してクイズにし、Zoomを使ってタブレット端末で撮影し、館内の展示を回りながら回答・解説したり、質問に答えたりしていくという流れで行った。なお、当日はホスト校から提示された進行表を当館担当が修正し、手直したものを台本として使用した。

実施の準備としては、教育普及担当職員がそれぞれ分担（ねぶた＝中沢、りんご＝滝本）して、ねぶたとりんごのクイズに対応する館内資料選定や、回答・解説内容の検討、提示パネルなどの補助資料作成を行い、依頼校との連絡・調整、機器の設定準備・操作等も分担して行った。

実施の様子

当館担当の第2部は、下記進行表にのっとり学芸職員3名で実施した。

当日進行表（当館担当分：決定版抜粋、アルファベットは生徒）

ホスト校教諭	「全国の学校のみなさん、それでは第2部のスタートです。 第2部は、青森県立郷土館と結んで青森のねぶたとりんごについて紹介します。第2部のメンバーを紹介します。 進行は、私、ホスト校教諭です。 クイズを出題するのは、SとOです。」 説明をしてくださるのは、青森県立郷土館の中沢先生と滝本先生です。 よろしくお願いします。 最初は、青森ねぶたの紹介です。 今年の製作されたねぶたの映像をみてみたいと思います。」 画面共有にして、映像を放送。
--------	---

ホスト校教諭	「さあ、映像からも青森ねぶたの迫力が伝わりましたか？ それでは、1問目のクイズです。S君、お願いします。」
S	「はい。第1問です。みなさんに見てもらったねぶたですが、この題材は、いつ決まるのでしょうか？ ①前の年の祭りが終わったあとすぐ ②今年の1月 ③今年の4月 それでは、みなさん、答えを考えてみましょう。シンキングタイムスタート。 みなさん、時間です。チャットで答えを入力してください。 代表して兵庫県の加古川養護学校さん、答えの発表をお願いします。 それでは、中沢先生、正解をお願いします。」
中沢 ホスト校教諭	答え「①前の年の祭りが終わってすぐ」 説明を行う。 「みなさん、難しかったですね。それでは、次のクイズです。O君、お願いします」
0	「はい。ねぶた祭りには、跳人という人たちが参加して、盛り上げてくれます。この跳人の人たちは「ラッセラーラッセラー」という掛け声をします。この掛け声の意味は何でしょう？ ①わっしょい ②いっしょに跳ねるぞ ③酒やろうそくを出せ それでは、みなさん、答えを考えてみましょう。シンキングタイムスタート。 みなさん、時間です。チャットで答えを入力してください。 代表して岡山県の倉敷真備特別支援学校さん、答えの発表をお願いします。 それでは、中沢先生、正解をお願いします。」
中沢 ホスト校教諭	答え「③酒やろうそくを出せ」 説明を行う。 「次はりんごについて紹介します。こちらも最初に映像をご覧ください。」 画面共有にして、映像を放送。
S	「さあ、それでは、りんごのクイズに入ります。Sくん、お願いします」 「はい。日本で育てられているりんごは全部で何種類あるでしょう？次の中から答えを選んでください。 ①100種類 ②1000種類 ③2000種類 それでは、みなさん、答えを考えてみましょう。シンキングタイムスタート。 みなさん、時間です。チャットで答えを入力してください。 代表して広島県の広島西特別支援学校さん、答えの発表をお願いします。 それでは、滝本先生、正解をお願いします。」
滝本 ホスト校教諭	答え「②2000種類」 説明を行う。 「それでは、最後のクイズです。Oくん、お願いします」
0	「はい。今、僕は赤いりんごと黄色いりんごを持っています。さて、赤いりんごと黄色いりんごでは、どちらが甘いでしょう？答えは次の中から選んでください。 ①赤いりんご ②黄色いりんご ③どっちが甘いか判定が難しい それでは、みなさん、答えを考えてみましょう。シンキングタイムスタート。 みなさん、時間です。チャットで答えを入力してください。 代表して福岡県の直方特別支援学校さん、答えの発表をお願いします。 それでは、滝本先生、正解をお願いします。」
滝本 ホスト校教諭	答え「③どっちが甘いか判定は難しい」 説明を行う。 「それでは、実際にO君に試食してもらって、結果を報告したいと思います。」 担任の先生からりんごをもらい、試食する。 「それでは、O君、甘かったのはどっちですか？」 甘かったのはどっちか答える。
ホスト校教諭	「全国の学校のみなさん、クイズはどうでしたか？次は、質問コーナーになります。今回は東京都の府中けやきの森学園と富山県のこうし支援学校からの質問について、中沢先生、滝本先生に教えてもらいたいと思います。」 「府中けやきの森学園さん、質問をお願いします」
質問者 中沢	質問をする。「ねぶたという名前の由来は何ですか」
ホスト校教諭	質問に答える。 「2つ目の質問です。こうし支援学校さん、お願いします。」
質問者 滝本	質問する。「なぜ、青森県ではりんごの栽培が盛んなんですか」
ホスト校教諭	質問に答える 「みなさん、青森からの遠隔社会科見学は、以上で終わりとなります。」
S	「みなさん、面白かったですか？」
ホスト校教諭	「全国の学校のみなさん、2時間のおつきあいありがとうございました。」 「来年も青森県に負けないくらい面白い内容で社会科見学を行いますよ。ぜひ楽しみにしてください。それでは、みなさん、さよーならー！！来年も会いましょう。」



ねぶたクイズ 回答・解説



りんごクイズ 回答・解説

(3) 令和3年度中の予定

今年度は、事例①の参加校を対象に下記3回のオンライン遠隔授業を予定している。

- ・ 令和4年1月17日「青森ねぶたと津軽塗」
- ・ 同年 2月21日「江戸時代の西廻り航路、東回り航路では何が運ばれたのか」
- ・ 同年 3月17日「室町時代におけるアイヌと青森県の交易を知ろう」

これらが予定通り実施されると、令和3年度は3校を対象にしたものが4回、20校を対象にしたものが1回、計5回実施されることとなる。(中沢秀一)

4. ホストとしての令和3年度オンライン活用事業

令和2年度までのオンライン会議システムを使用したものは、すべてゲストとしての参加であったが、今年度はZoomライセンスを取得したことによって、ホストとしてのオンライン活用事業を実施することが可能となった。当館がホストとして実施したのは、「東北地区博物館実務担当者会議」と青森県博物館等協会による「青森県博物館大会」の2件であり、ここではそれらの開催準備状況と実施した様子を紹介していく。

(1) 東北地区博物館実務担当者会議での活用

この会議は、東北地区の県立博物館6館の学芸及び総務の実務担当者が参集し、日ごろの博物館における実務の課題について意見交換を行うことによって博物館業務の推進に資することを目的として開催されている。幹事館は各県持ち回りで開催されており、当館が幹事を務めるのは平成26年度以来であった。例年であれば1日目午後に協議及び情報交換を行う会議、幹事館展示の視察、2日目午前中に幹事館周辺施設の視察、という2日間の日程で行われていた。

ところが岩手県立博物館が幹事館を務めた昨年度(令和2年度)は、各館へ会議開催形式希望調査を行った上で、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点によって「対面での会議を行わない(集合開催としない)」こととし、協議・情報交換事項の集約、回答と質疑応答までをメールを媒介として行う、書面開催となった。なお、このときの希望調査では、「Zoom等のオンライン会議形式は、実施が難しい館があるので、今回は実施いたしません」との結論に至っていた。

①準備の経過

(1) 開催方針の検討

当館が幹事館を務める令和3年度は、令和2年度の状況を踏まえ、対面開催と書面開催の両形式での開催を検討した。

4～7月に担当者が実施素案(開催形式案とスケジュール案の作成、各館へ開催希望調査の実施など)を作成し、学芸課内、館全体で検討した。なお新型コロナウイルス感染者数は、開催形式を検討していた4・5月に第4波があったことから、オンライン形式での開催も念頭に進めることとなった。また、東京オリンピック・パラリンピックの開催と重なる7月後半にはさらに感染力の増した第5波が始まり、断続的に予断を許さない状況が来襲することが実感されたため、対面開催は不可能と判断された。

8月に各館へ開催希望形式調査を実施したところ、3館がオンライン形式希望、3館が書面形式希望で、回答は拮抗したものであったが、それぞれを希望した理由は以下のとおりであった。

<書面形式希望の理由>

- 日程確保に支障がでる可能性があるため。
- 昨年度、オンライン形式では対応不可とする館があったため。

○オンライン開催への対応PCが1台のみで発言者が入れ替わることになり、円滑な進行を阻害する恐れがあるため。
 <オンライン形式希望の理由>

○昨年は紙上（書面）形式で行ったが、紙上（書面）ではうまく内容が伝わらないという場面が多いように感じる。
 その場での意見交換によってはじめて内容が理解できるという場面も多くあると思うので、より多くの職員が参加できるようZoom形式にし、意見交換しやすい場面をつくったほうが良いと考える。

○書面実施も回答可能だが、意見交換等がしっかりとできればと考え、オンラインを希望する。

○（特に意見なし）

「意見交換を行えるのはオンライン形式である」との積極的理由が、オンライン形式希望館から強く感じられた。そこで書面形式希望館3館が、機材やインターネット環境等、オンライン形式で対応できる環境にあるか、電話にて聞き取り（補充調査）を行ったところ、いずれの館もコロナ対策が進んだのか、施設・設備が整備されオンライン形式に対応できるとの回答であった。このことを踏まえて担当者、館内で検討した結果、今年度の会議はオンラインでの開催方式とする方針とし、併せてZoomライセンスの取得を進めた。

また、オンライン形式で行う場合は参加各館で、機材やりくり、行事・イベントなどの諸都合によって会議へ参加できない日が想定されたことから、各館担当者へ希望日調査を行い、全館が参加できる日取りを確定させた。

以上で会議の開催形式方針とその内容が固まったことから、会議開催要項、参加申込書・協議題募集などを各館へ発出するとともに、中泊町博物館へオンライン視察講師依頼文を発出した。その後、参加申込と協議事項の集約、協議事項への回答集約、会議資料作成・配布といった準備を進めた。

（神 康夫）

（2）オンライン視察の検討・準備

例年、本会議の最終日は、各幹事県が案内役となって参加者一同で幹事県内にある史跡名勝等を視察することが慣例となっていたが、今回の会議はオンライン形式となったことから、視察は実施できないと考えていた。しかし、各館から提示された協議事項の中に、オンラインの活用について様々な工夫が施され、模索しながら実施している状況が感じられたことから、視察についても直接現地を訪問するのではなく、オンライン形式で現地から生配信する方式を採用してみることであった。今回初めての試みであり失敗する恐れが多分にあったが、他県博物館学芸員にも見ていただいて良くも悪くもオンライン活用の一実践例として、手法や課題の洗い出しをする良い機会と捉えて試行的に実施することとした。

まずは、視察先の選定である。視察先に求められる必要条件として、青森県の代表的な自然や史跡名所であるとともに、県外からの参加者にとっては、これまで来訪したことが無い史跡や名所であることが求められた。それらの条件を満たす候補地としてすぐに挙がったのが「宮越家」であった。

宮越家は、青森県北津軽郡中泊町大字尾別で代々続いてきた有力家である。その先祖は、近世前期に加賀国江沼郡宮ノ越から津軽へと移住した一族だと伝えられる。その後、18世紀初めに分家したヤマシチが、豪農として栄えて、近代以降は宮越姓を名乗り、農林業、商業、金融業等を営む地主へ成長した。広大な邸宅の敷地内には、大正9年（1920）に9代目の当主宮越正治が、妻の誕生祝と厄除けのために建立した離れ「詩夢庵」があり、その屋敷内には、中近世の書画、螺鈿や蒔絵が施された豪華な調度品や美術工芸品、小川三知制作のステンドグラスなどが飾られている。さらに隣接する庭園「静川園」は、大石武学流庭園の初期の形態を残しているとされる。中泊町では2018年から宮越家の学術調査を開始して、同年には「宮越家離れ」を町有形文化財（建造物）、「宮越家庭園」を町記念物（名勝）に指定し、2020年には、「宮越家主屋」「宮越家文庫蔵」「宮越家米蔵」を町有形文化財（建造物）に指定した。2019年度には宮越家住宅・資料保存活用計画を策定し、保存活用整備が進められている。

観光資源としての宮越家の全国的なPR活動は、近年始まったばかりであるため、県外の博物館関係者にとっては、訪問経験が少ない真新しい視察先となることが予想された。よって大会当日、宮越家へ当館スタッフを派遣して、その美しい風景を映像で撮影し、オンラインを通じて参加者へ配信して紹介することを計画した。

すぐに同家の保存管理等の中核となっている中泊町博物館を通じて中泊町へ打診し、内諾を得ることができた。そして館内職員の係分担を行った。大会当日、当館内でオンラインのホスト・基地局となるスタッフ以外に、宮越家現地に赴いて撮影・オンライン配信するスタッフをチーム編成し、事前の現地調査とリハーサルを行った。なお、宮越家は、青森市内にある当館から自動車で片道約1時間30分の行程を必要とするため、日帰りで打合せとカメラリハーサルを行うためには、どうしても滞在時間は限られてしまう。よって、初回の打ち合わせは、午前中に移動して昼食をとった後、すぐに実施することにした。現地リハーサルで事前に確認しておく主なポイントは下記の点であると想定した。

- (1) 宮越家への同事業の概要説明および協力内容の確認
- (2) 撮影対象となる宮越家の屋敷および庭園構造の把握
- (3) 撮影可能な場所と、解説を加えながら定点で撮影すべきポイントおよび撮影ルートの確認
- (4) オンライン配信に必要な機器類の確認
- (5) 現地で Wi-Fi 受信可能なエリアの確認
- (6) オンラインを使ったカメラリハーサルでの技術面の確認（機器類の動作確認、アングル、照度等のチェック等）

なお、この現地リハーサルで準備した機器類は以下のとおりである。

- (1) オンライン配信用のノートパソコン
- (2) ポケット型 Wi-Fi ルーター
- (3) 機器類充電用の車載電源ケーブル
- (4) マイクおよびライト付き小型 WEB カメラ
- (5) 本部および撮影スタッフ全員の連絡用 LINE グループの設定

実務担当者会議は、各方面のオンライン会議等で利用されることが多い Zoom を用いたオンライン配信で実施することとした。本部となる当館には、それらに活用可能な機器類の一部が配備されており、それらを工夫して組み合わせて活用することとした。そのなかでも特に、正面入り口のエントランスで入館者向けの情報を投影していた大型モニターをオンライン用モニターへ流用したことで多人数での視聴が可能となった。

しかし、遠隔地で、Wi-Fi 環境が整備されていない宮越家から映像をオンラインで配信するための機器類は当館にはなかった。よって、青森県総務部行政経営課システム管理運用グループが管理し、随時、庁内の各課へ貸し出している Wi-Fi ルーター付きモバイル型インターネット専用パソコンを予約し、借り出して使用することとした。それが (1) および (2) である。さらにこれらのパソコン類について、公用車で移動中や中継先の現地でも充電を可能とするために、自動車のシガーソケットから電源を供給できる装置 (3) が必要となり、たまたま筆者が所有していた物で一時的に代用することとした。これによって公用車で移動中でも、本部とオンラインで打合せや試験配信することが可能となった。

そして (4) のカメラである。当初は、当館で令和 3 年度から複数作成し、インターネットで配信している YouTube 広報番組「キョドチャンネル」制作用として使用していたデジタルビデオカメラを使う予定だった。しかし実際に操作してみると、借りてきたオンライン用ノートパソコンと接続するためには、新たにキャプチャーボード等の機器類を用意しなくては接続できないことが判明した。よって今回は筆者が日常使用している、USB ケーブルで接続し音声マイクや照明ライトも付属している小型 WEB カメラを持ち込んだ。

なお、これらの機器類が揃えば、撮影と配信が全て可能となるわけではない。操作する技能とスタッフ同士の動作の連携こそ重要だった。そのためのスタッフのチームワークを工夫した。求められる具体的な行為としては、WEB カメラとオンライン用パソコンを接続した機器類を携えて、室内と野外の起伏に富む場所を移動して歩きながら撮影することであった。よって、職員 1 名が、パソコンと Wi-Fi ルーターをつないだものを美術スケッチ用の画板の上に固定し、さらにそれを頸部から紐で吊るして胸の前に捧げた。さらにもう 1 名の職員が、そのパソコンにケーブルをつないだ WEB カメラを持って撮影するカメラマンとなる。常にその二人三脚で移動しながら撮影する方法を考えた。さらにもう一人、照明係が付き従うことになる。そして (5) であるが、本部と撮影スタッフと全員で、現状把握や情報共有、緊急時の対応を可能とするため、職員内で LINE グループを作った。

リハーサル当日は、宮越家当主に大会の趣旨と概要説明を行い、承諾をいただいた後、案内役である中泊町博物館 齋藤淳館長と視察ルートを検討した。その結果、最初に屋外で古い時期に造られた「旧大石武学流庭園」の解説からスタートし、スタンドグラス等が見どころである宮越家離れ「詩夢庵」内部において、涼み屋敷の間（スタンドグラス）、廊下・円窓の間（スタンドグラス）、襖絵などを解説し、再び屋外に出て、池泉庭園である「静川園」と達磨堂を巡りながら解説するルートを仮に設定し、リハーサルを行ってみることとした。

実際にオンラインで本部と現地のカメラをつないで、屋敷内と庭園内を移動しながらリハーサルの撮影を行った。実施してみて、本番に向けて浮かび上がった課題は次の点である。

- (1) 敷地内は、Wi-Fi の電波を受信可能となるエリアが一様ではなく、濃淡が存在し、回線が途切れる箇所があること
- (2) 小型 WEB カメラが軽量であるため、どうしてもブレやすいこと。

(3) 小型 WEB カメラの性能的限界で、ピントおよび露出、照度の調整等が不可能であり、どうしても中継の映像と音声の不鮮明なものになってしまうこと。

まず(1)については、カメラを構えて移動していれば、遮蔽物等の関係であろうか、同じ屋敷内でも機器類が Wi-Fi の電波を受信できず、一時通信が遮断される場所があった。そのうちの一つは、美しいステンドグラスの窓が張られた近代の浴室であり、その映像を送信できないのが大変残念ではあったが、やむをえず、その場所は今回の撮影ルートから割愛せざるをえなかった。

(2) については、使用した小型 WEB カメラがあまりに軽量であるため、カメラを素早く大きく振らないように気をつけていたが、操作者が起伏に富む室内や庭園を移動する際、どうしても揺れてしまい、アングルがぶれてしまった。よってブレを防ぐため、あえて WEB カメラを大型の三脚に取り付けて大きさと質量を増やし、それを撮影者が両手で捧げ、己の体幹と一体化させて構えられるようにした。そのうえで撮影者は少し腰を落とし、両膝を柔かく曲げて自動車のサスペンションのようにして、上体とカメラが上下左右にブレないように路面を確かめながら、ゆっくりと不整地を歩行することが常に強いられた。この撮影技法については、カメラマン役となった筆者が、かつて青森県史編さん室勤務の際、国立民族学博物館が主催した人類学の映像記録作成の研修で学んだ撮影技法を活かすことができた。

最も大きな課題となったのが(3)であった。今回の撮影では、暗い室内や明るい野外など、明るさが異なる様々な環境を移動しながら撮影することになる。その際、次々と変化する撮影環境に対して、ピントや露出、照度等の調整機能がない小型の WEB カメラでは、対応できないことに切歯扼腕する思いを何度もした。暗い屋内では自動ピント合わせが機能せず、ピントが合うまで数秒以上要する状態であった。これを修正しようと照明を当てても、照射範囲が狭いため画角隅(末端)との明暗差がより大きくなり、画面明るい部分にのみピントが合ってしまうとともに、色彩も大きく損なってしまう。これらの状況は、襖絵など奥行があって、豊かで繊細な色彩を有するものであればあるほど、それをうまく撮影できない無念さを感じた。また宮越家の中で最たる見どころであるステンドグラスを撮影すると、今度は外光が強すぎて真っ白な画像となり、ステンドグラスの絵画的輪郭を表している暗の部分がいわゆる「飛んだ」状態になってしまう。つまり用意した照明装置もあまり効果がなく、宮越家で最も有名な室内のステンドグラスや絵画、美術品の鮮やかな色彩を撮影して送信することが全く困難だった。そして暗い室内から明るい野外に出た瞬間、カメラのホワイトバランス自動調整が機能しないし、当日の天候や日差しにも大きく左右されることが予想された。これらのことは、プロのカメラマンやテレビクルーなどのマスメディアにとっては、当たり前のことであろうが、素人の我々は初めてその難しさを実感させられたのである。

また、案内役の解説は、移動や身体の向きを変えながら発せられる音声であるため、小型 WEB カメラ内蔵マイクでは拾いきれないことがわかった。そこで案内役の声をハンズフリータイプのマイク・スピーカーで拡大し、その音声を内蔵マイクで拾うことに修正した。

リハーサル後、帰路の車内では、様々な反省点が議論された。しかしそれら課題については、大会までの準備期間が限られているため、解決できない課題もあった。とくに(1)と(3)については、追加機器が必要となり、予算的な措置が必要となるが、調達する時間も限られている。不可能な課題を見極めた上で、現在、可能な範囲で諸問題を解決して大会当日を迎えざるをえない。

その策として例えば、宮越家で最も有名なステンドグラスや調度品等の美しさをオンライン映像で送信できない問題については、すでに中泊町が制作していた一般向けの宮越家紹介ビデオをお借りすることにした。具体的には、中継の冒頭で中泊町製作動画の一部を上映して、そのなかで美しいステンドグラスや調度品を紹介してから、実際の現地中継へと展開していく方法とした。

(小山隆秀)

②会議当日の実施状況

10月26日(火)に東北地区博物館実務担当者会議を実施した。参加6館の会議出席者及びオンライン視察配信者の人数は、以下のとおりである。

会議出席者(視察視聴者)	他県博物館担当者	8名	計17名
	当館職員	9名	
オンライン視察配信者	現地案内講師(出演者)	1名	計6名
	宮越家御当主(出演者)	1名	
	撮影・中継スタッフ(当館職員)	4名	

オンライン会議とオンライン視察、それぞれの実施状況を以下に記す。

(1) オンライン会議の実施状況

10月25日(月)までにミーティングID、パスコード、留意事項、会議資料等をメール送信。当館の配信会場とした小ホールでは、PC・カメラ等の機材を準備、セッティングし、各機材の作動状況を確認・把握し、各機材の接続テストを幾度か行う。パソコン機材としては、司会・発言者用PC(ホスト機)、大型モニター(デジタルサイネージ)接続用PC(ゲスト機)、AI会議録作成用PC(青森県総務部行政経営課行政改革推進グループ所管)のPC計3台を配備し、使用した。

- 10月26日(火) 会議当日は、下記のタイムテーブルで実施した。
- 午 前 機材等の再確認と動作確認を行う。
 - 13:00 Zoomでの入室開始。館名・氏名を確認し、必要に応じて修正を依頼する。
 - 13:30 開会、館長挨拶、自己紹介、協議・意見交換。
 - 15:03～15:20 会議参加者は休憩。
その間に現地配信スタッフがZoomミーティングに入室し、司会(ホスト事務局)と接続や進捗状況等を確認し、最終打ち合わせを行う。
 - 15:20～16:15 現地からのオンライン視察配信。
基本、現地からの配信としたが、以下の時間帯は司会(ホスト事務局)も配信に参加。
15:30～15:35 約5分間に編集した宮越家動画を配信(共有)
16:03～16:15 宮越家との質疑応答
 - 16:15～16:20 情報提供、事務連絡、閉会



当館小ホール(会議配信)の様子



会議画面の様子



発言者と司会

オンライン会議を終えて

オンライン視察については次項で詳述することとし、ホストとして運営したオンライン会議は、初めての開催であったが大きなトラブルはなく開催できたと思っている。

ただ、司会と会議参加者が同一室内に配席するレイアウトであったことから、参加者は司会の発する音声と、オンラインネットワークを通じてディスプレイから発せられる司会の音声、両方を耳にすることとなり、非常に煩わしい状況であった。そこで11月に開催した青森県博物館大会ではこの反省を生かし、PCの配置室を分けるなど、改善を試みて実施することができた。

また、当初は、青森県総務部行政経営課で用意しているAI会議録作成用PCを活用して議事録を作成することで準備をしていたが、不具合が生じ事前学習させることができなかった。そこでZoomの録画機能で映像・音声を記録し、これを基に議事録を作成することに変更することになったが、有用な機能で役立った。

(神 康夫)

(2) オンライン視察の実施状況

当日の準備・リハーサル

本番当日は、リハーサルよりも早めの2時間ほど前から現地入りして、入念な準備を行った。まずは、オンライン視察の案内役として出演していただく中泊町博物館館長と早めに合流し、全体の構成と口頭解説する箇所について打ち合わせを行った。その際、特に台本を用意していないため、様々な演出や工夫を試みて混乱するよりも、あえて全体の流れや構成をシンプルにした。つまり、宮越家の建物群と庭園に精通し、日頃からその案内役を務めている中泊町博物館館長に、普段どおりの案内と誘導をしていただき、それに撮影クルーである我々が付き従っていく構成とした。

具体的な現地撮影・配信隊の編成は次のとおりである。まず、クルーの先頭を同館館長が歩き、それを追いかけるように前述のカメラおよびパソコン機器類操作の2名が続く。そのカメラに写り込まないように、大型のスケッチブックとマジックペンで出演者に指示(カンペ)を出すスタッフ1名と、屋内での照明・全体の安全管理・本部との連絡

調整等を行うスタッフ1名が背後を付いていく。よって合計4名が撮影チームとなった。

なお、宮越家からの配信時間は質疑応答を含め約60分間との指示だったので、その時間配分と現在時刻を、現地スタッフ全員がいつでも確認できるように、筆者が持参した大型の針時計を先頭のカメラマンが首から吊り下げ、常に全員が見られるようにした。

本番直前に2回ほど、全体の撮影コースと定点による撮影ポイント等を全員で確認した。そのうえで、最後のまとめのシーンとして、同館長が庭園全体を回った後、離れの縁側に座ったところで、宮越家現当主を加えてコメントをいただき、最後は、オンライン上で参加者と質疑応答を行ってもらうことを提案し、承諾を得て実施した。

オンライン視察配信（本番）の様子

すべての機器類を準備してよいよ本番を迎えた。すでに本部で会議は始まっているので、その議事が一段落したら、我々の配信へ切り替えることとなる。しかし、パソコンの設定の問題であろうか、スピーカーが発する音量がかなり低く、本部で開催されている会議の声も、こちらへ投げかけてくる会話もほとんど聞き取れない。これでは、いつこちらの配信を始めてよいかのタイミングすら識別できない。やはり「返し」のスピーカーやもう一台スタッフ用モニターが必要であったことを痛感した。

現地スタッフには焦りと緊張が走ったが、カメラマンを担当している筆者が、オンライン用ノートパソコンの小さな画面に映る本部司会の表情としぐさを見て判断し、カメラの前に立つ案内役の館長へ現地配信開始のサインを送り、視察のオンライン配信が始まった。これで、あとは途中で休止することも中断することもできないと自らを奮い立たせ、カメラを構えた中腰のまま歩きはじめた。

自前の小型WEBカメラにはモニターがないため、カメラマンは撮影していながらどのようなアングル、画面構成になっているか識別できない。よって、それを確認するためには、随行する仲間が首から捧げているオンライン用パソコンの小さな画面を振り返って確認するしかない。しかし随時、その確認作業をやっていたのでは、前方を歩いていく案内役を捕捉できないので、リハーサル時にあらかじめ、カメラアングルと照準を自分のなかでしっかりとイメージしたうえで歩かなくてはならなかった。途中、ズレたかと不安になったときだけパソコン画面をみて補正する。

また、カメラに内蔵されたマイクの有効範囲も限られているとともに、カメラとパソコンをつなぐケーブルが2メートルであるため、常にマイクとケーブルの長さの範囲内でカメラを構えて歩かねば映像も音声も断線する恐れがあった。さらにWEBカメラの上下左右のブレを解消するため、三脚に取り付けて質量を大きくしたカメラを、さらに体幹に密着させて一体化させ、低い腰で膝を柔らかく使い、階段や段差、砂利、草地、不安定な池の岸边などもゆっくりと歩きながら撮影していく。特にカメラを構えたまま野外から靴を脱いで玄関から屋内に入って屋敷内を回り、さらに縁側から靴を履いて庭園へ出ていく撮影ルートだったため、出入りする玄関と縁側にそれぞれ履物を用意しておき、靴を履く瞬間に、体幹とカメラがブレないように慎重に動かねばならなかった。照明担当のスタッフは、カメラマンの仕草を正確に捕捉しながら動いてくれた。

さらに注意すべきは、撮影中のカメラマンの視界が狭まるため、その足元や周囲や後方の障害物に気が付きにくくなることだ。起伏や遮蔽物に富む場所のため、万が一転倒して周囲の文化財を破損したり、池に転落して中継も機器類も全てダメにしてしまうことだけは絶対に避けなくてはいけない。途中で気づかないことがあれば、背後から付いてくるスタッフに、無言のままで、肩や背中を触ってもらって教えてもらう。

庭園の池の周囲も、起伏と凹凸に富む地形であった。さらに本番では、日差しが変化し夕日の強い光が正面からカメラに差してきた。そのため、ややもすれば強い光線のため、目の風景と人物の輪郭が画面上で消失してしまう瞬間があった。生配信しながら、そのトラブルを回避しつつ、同時にカメラアングルが不自然な動きとならないよう常に微調整を迫られ、大変苦戦した。

池の周囲を回っている際、撮影スタッフによるタイムキーパーの連絡がうまく行かなかったため、案内役が残り時間が少ないと認識してしまい、案内する歩みの速度が速まった。しかしカメラマンである筆者は、カメラのブレをふせぐように中腰の忍び足のままで起伏を移動していたため、捕捉していくことが難しくなり、焦ったことを覚えている。

ようやく池の周囲を巡り終わり、最後のシーンとなった。離れの縁側に戻った案内役が当主を招いて並んで座り、まとめの解説、質疑応答を行うシーンである。このとき、視察全体の流れを写すモニターと全体で音声を共有できる「返し」のスピーカーの必要性を再度、痛感した。しかし生配信中である。今ここでなんとかするしかない。とっさにスタッフが思いついたのは、彼が首から架けていたオンライン用ノートパソコンを、案内役と当主の方向へ向けてモニター代わりとすることだった。しかし、それを固定する土台が無いため、スタッフ4名全員がしがみながら、自らの身体を折り曲げるようにしてそれらの機器類を支えて差し伸べて対応した。

画面上では終始、和やかなムードで生配信は進み、無事に終了した。一同深く安堵したことを覚えている。機器類を撤収し、宮越家当主と中泊町博物館館長へ謝辞を述べて現地を後にした。



WEBカメラとノートパソコンの二人三脚
によるライブ中継の方法（再現）



オンラインで配信された視察の映像

オンライン視察配信を終えて

今回は試行錯誤のなかで多くを学んだ。必要な機器類を集めて組み合わせて実施したが、やはり必要な機能を完備した機器類を備えておく必要性とともに、視察先からの現地配信においても、事前に詳細な台本を作成して何度も打ち合わせとリハーサルを重ねておく重要性も痛感した。これらの実践知を通じて、さらに新しい試みに挑戦してみたい。

（小山隆秀）

（２）青森県博物館大会での活用

準備の経過

青森県博物館等協議会は、会員相互の連絡提携と、博物館活動の発展増進を目的としており、現在は青森県内の博物館および美術館 45 館で構成されている。毎年秋には、青森県博物館大会を開催している。令和 3 年度の大会は、令和 3 年 11 月 26 日（金）午前 10 時 20 分から午後 3 時 15 分までの時間帯で開催する予定であった。なお、当年のテーマは「災害と向き合う博物館」である。東日本大震災から 10 年目となる現在、当時の被災の記憶と経験をもとに、各地では復興と防災の工夫が続けられ、幾つかの成果が結実してきた。我々、博物館の世界でも、かけがえない文化財や資料を災害から守る工夫と、被災資料のレスキューについて、実践を通じた模索と見直しが積み重ねられてきた。東北地方で新たな大型地震発生の可能性と対策が唱えられているいま、国立歴史民俗博物館による大規模な文化財レスキューの実践例を紹介し、これからの博物館の災害対策の参考とすることがねらいである。午前は弘前大学人文社会科学部准教授葉山茂氏による講演「地域の被災前と被災後をどうつなぐかー国立歴史民俗博物館での活動から」を開催し、午後は当館の事業である「博物館の仕事普及啓発事業」の研修会として、株式会社アピール常務取締役佐藤和善氏による講演「3D プリンタの基礎知識と活用事例のご紹介」の開催を予定していた。もちろんこの講演も青森県博物館大会に出席した各博物館職員も受講可能である。

当初、青森県総合社会教育センター 2 階第一研修室での対面式で行う予定であったが、直前の県内における新型コロナウイルス感染症拡大の状況から、急遽、参加者が参集する対面式開催方式は採用しないこととした。昨年度も同様の事態が発生し、そのまま書面開催方式を採用したが、今年は新しい試みとして、オンライン方式で開催することに切り替えた。これは前述した東北地区博物館実務担当者会議におけるオンライン開催の経験が活用可能であると考えたこともあった。

実は本大会は、計画当初から、同感染症対策のため、オンライン方式による開催に切り替える場合があることも想定して準備を進めていた。そのことについてはあらかじめ、会員館および講師二名から内諾を得ていたのである。会員各館には、出欠確認の連絡時に、オンライン参加は可能かどうか確認を行っており、過半数の館が「可能である」と回答していた。よって、急遽オンライン開催に切り替えることについて改めて関係者へ通知をしたうえで、改めて参加希望を確認したが、特段、大きな混乱はなかった。なお、より多くの参加者を募るため、もしも「欠席」の回答を提出した後でも、当日の都合がつけば参加を受け入れる旨も各館に伝えた。急な出欠変更が可能となることこそ、オンライン開催の特性であると考えたためである。

関係者全員に、オンライン開催への切り替えを通知してから、まずは二名の講師とオンライン上で打ち合わせを行った。Zoom 会議を予約設定し、当館職員 2 名が本部となって、それぞれ 2 名の講師とオンライン上で、簡単な打ち合わせとともに、当日それぞれの講師が説明で用いるパワーポイント画像や動画を試験的に上映し、講演会のリハーサルを行った。幸いにも、二人の講師は、普段から Zoom による講義や説明会等の経験を積んでおられ、操作に習熟されていた。

課題は本部側の環境にあった。つまり、大会当日のオンライン基地局および当館職員が視聴する会場として活用を考えていた当館1階小ホールが、複数の音響機器類を集めて同時に稼働させていたことからか、どうしてもハウリングが発生した。よって、基地局機能だけ、隣接するゲストキュレーター室に分けて設置することにした。そこにはパソコン2台とそれぞれに一名ずつの職員が張り付いて、午前の講演と午後の講演でホスト役を交替して担当することとした。さらに大会冒頭で挨拶を述べる会長（青森県立郷土館館長）や当館学芸課長の専用シートを設けて、マイク付きWEBカメラとともに、表情を明るく映し出す照明装置および名前の表示プレート等も用意した。なお、新型コロナウイルスの飛沫感染防止対策としてこれらのスタッフの座席の間に透明なアクリルボードの仕切りを設置した。そして万が一の際、連絡調整等を行うサポート役を数名配置した。

実施状況

当日は、下記のタイムテーブルで実施した。

＜午前の部＞

10:00 ～ 10:15 「午前の部」入室開始

10:20 ～ 10:30 博物館大会開会宣言・会長挨拶・講師紹介

10:30 ～ 11:40 講演会

◇テーマ「地域の被災前と被災後をどうつなぐかー国立歴史民俗博物館での活動から」

講師 葉山 茂 氏（弘前大学人文社会科学部准教授）

（11:40 ～ 11:50 休憩）

11:50 ～ 12:00 質疑応答（終了後、昼休憩）

＜午後の部＞

12:55 ～ 13:10 「午後の部」入室開始

13:15 ～ 13:25 博物館の仕事普及啓発事業の趣旨説明、講師紹介

13:25 ～ 14:25 講演及び実演

◇テーマ「3Dプリンタの基礎知識と活用事例のご紹介」

講師 佐藤 和善 氏（株式会社アピール常務取締役）

（14:25 ～ 14:40 休憩）

14:40 ～ 15:15 質疑応答、閉会

大会当日は、2名の講師だけは早めにオンライン上で接続確認と最終打ち合わせを済ませるようにした。その後で、逐次、オンライン上で参加者を受け入れていった。そして大会開始前の待機画面には下記の留意事項を提示した。

「参加者の方々へのお願い」

- （1）当日参加も可能ですが、入室時は、館名と氏名を表示ねがいます。
- （2）大会中は、各位ともに御自身のビデオおよびマイクはオフとし、質疑応答で指名された場合にのみマイクをオンにして御発言ください。
- （3）質問等があれば、ホストである郷土館宛に質問事項を送信し、全公開にはしないでください。講演終了後、講師から回答いたします。
- （4）各参加者による大会の録画・録音等は御遠慮ください。

上記の留意事項は、多くの人々が同時にオンライン上で集まって、ひとつの講座を展開していくうえで、必要な取り決めであると考えていた。それは、業務以外の日常生活でもオンライン上で学会や研究会等に参加して試行錯誤していた経験知も役だった。しかし、当方の連絡ミスで、当日出席予定だった数名の会員が、誤って、計画当初の会場である青森県総合社会教育センターへ出向いてしまったという情報が入った。反省するとともに、今後より確実な連絡方法は何か再検討する必要がある。

それでも大会が始まると、他には特段、混乱もなく、無事に講演が終了した。これらは、前述した東北地区博物館実務担当者会議でのオンライン開催のホスト役を務めた当館職員の経験知が十分に活かされたのではないかと。特に今回は、視察先と基地局である当館、東北各博物館の複数箇所を結ぶ複雑な配信であるうえに、より様々な障壁や課題がある野外からの中継も経験している。今回はそれと比較すれば、ほぼ全ての機器類が完備されており、安定した環境である館内からの発信となったため、安心感を持って遂行できたのである。

（小山隆秀）



オンラインによる青森県博物館大会
(当館小ホール)



オンラインで会長挨拶を配信するスタッフ
(当館ゲストキュレーター室)

5. 今後の活用見通しと課題

博物館、各学校や公共施設でのデジタル環境の整備が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から加速度的に整いつつある昨今、これまであまり身近ではなかったオンラインによる遠隔授業や研修・講座・講演・会議などが必然的に行われるようになってきている。当館は遠隔授業に、ゲストとして令和元年度3回、令和2年度2回、令和3年度5回（予定）の計10回を実施することとなる見込みである。またホストとしての会議・講演会を、今年度2回実施し、そのうち1回は宮越家及び庭園の視察（解説）配信を行った。

オンライン会議システムを活用した事業の必要性は今後もますます高まるものと考えられる。当館や、当館職員もその状況に対処すべく、機器の操作も含めたスキルアップが求められ、対応していかなければならないのだが、本来の博物館としての本質を考えたときに、オンラインでの活動が主流に迫るようになるかもしれない状況に、はたして両手を挙げて歓迎してよいものかという葛藤がないわけでもない。たしかにオンラインの活動は遠隔授業にしても、WEB会議にしても、わざわざその場に足を運ばなくてもほぼその場にいるような活動ができ、臨場感も味わる。しかし、我々博物館（青森県立郷土館）としてはそれで満足されてはやはり心許ない。本来はより多くの方に来館してもらって、実物資料を見たり触れたりすることにその存在価値があるわけである。たしかに当館は現在、建物の耐震強度不足が判明し休館中であり、コロナ変異株のオミクロン株が猛威を振るいそうな気配もあったりと、いろいろな方に来館してもらうような状況ではないのも事実である。しかし、それをきっかけにWEB博物館やオンライン遠隔授業が活動の主流になってしまうことには気を付けなければならないのではないかと（休館中だからこそオンラインで発信していかなければならないのであろうが…）。要は、オンライン活動が便利すぎるゆえに恐れているのが、「自宅にいてもオンラインで見学・活動・学習できるからわざわざ行かなくてもいいや。」というようになりはしないかということである。

今後、新型コロナウイルス感染症拡大の状況がどのように変化していくのかは全く予想もできないが、逆にその防止対策のなかから、複数の遠隔地と同時につながるオンライン方式について、これまでの遠隔授業や会議（視察配信）、大会（講演）といった実践を通じて、新たに学ぶ機会に恵まれた。おそらく現在のオンライン方式は、それぞれの実践のなかから、より効果的な新しい方法が発見され錬磨されていく過程にあり、未だ正解は導き出されていないだろうが、この試行錯誤のなかから、新しい博物館の役割や機能を見出していきたいと考えている。

（神 康夫・小山隆秀・中沢秀一）

謝辞

本稿で取り上げた事業の実施及び本原稿執筆にあたって、青森県立青森第一養護学校教諭の小田桐敬氏をはじめとする特別支援学校各位、東北地区博物館各位、オンラインでの現地案内を務めていただいた中泊町博物館齋藤淳館長、宮越家を守り伝えてこられた宮越家御当主宮越寛氏、青森県博物館大会・博物館の仕事普及啓発事業で講師を務めてくださった弘前大学人文社会科学部葉山茂准教授、株式会社アピール佐藤和善常務取締役の両氏、青森県博物館等協議会加盟館各位に御協力を賜りました。ここに記し、感謝申し上げます。

《参考文献》

- 富士道太 2020 「学校と博物館を結ぶ遠隔授業」『郷土館のモノ語りNo.8』（令和2年度青森県立郷土館博物館の仕事普及活動啓発事業）青森県立郷土館
- 小山隆秀 2021 「新型コロナウイルス感染拡大下における博物館活動と民俗研究」『青森県立郷土館研究紀要』第45号

